〔論　文〕

犯罪被害者を支援する警察官のＣＩＳ等（惨事ストレス・ＰＴＳＤ等の二次受傷）に関する研究

鹿児島純心女子大学大学院　久留一郎
鹿児島純心女子大学大学院　餅原尚子
鹿児島大学教育学部　関山徹

和文要旨

犯罪被害者支援に携わった警察官を対象にしてアンケート調査をし，そのストレス状況（ＣＩＳ・ＰＴＳＤ傾向の二次受傷など）および予防，ストレス緩和要因について臨床心理学的視点から検討をした。警察・被害者支援室の協力を得て，2006年に実施した426名について分析した。その結果，ａ）ストレスへの対処は，バランスが大切であること，ｂ）ＰＴＳＤ傾向者への援助や予防は，画一的におこなうのではなく，その人のもつコーピング・スタイル（coping style）に応じたものが有効であること，ｃ）女性警察官や既婚者への支援はより手厚くする必要があること，などが，明らかになった。二次受傷（secondary traumatic stress）の先行研究でも支援者保有が有効であることは，多々指摘されており，これらの観点を活かして職場での精神的支えをどのように作るかが，犯罪被害者支援を左右する鍵となるだろうと考察された。

キーワード：犯罪被害者　警察官　ＣＩＳ　ＰＴＳＤ　二次受傷

１．問題

トラウマを受けた人を助ける人，トラウマを受けた人とともに生活する人，あるいは職務上，トラウマと日常的に係わる人にも，さまざまな反応が生じる。時にはそれが家族を崩壊させたり，職業の中断を余儀なくさせたりすることにもつながる。そこまでいかなくても，こういったトラウマの間接的な影響が，日常生活に波及することは，この領域に関わる者の多くが経験するところである（小西，2007）。

本研究では，被害者の支援にあたる警察官に生じるトラウマ反応を，ＣＩＳ（惨事ストレス），ＰＴＳＤ傾向，二次受傷といった広義のものととらえたい。海外の文献でも，ＣＩＳについては，狭義のＰＴＳＤ研究の対象と捉えたものが多くなっている。

二次受傷とは，「トラウマ体験を負った人と共感関係にある中，彼らの体験に繰り返し暴露されることによって生じる影響」といわれる。つまり，一人の人から繰り返し外傷体験について聴くこと，あるいは一人からは一度しか聴かずとも大勢の人からの相談を受ける立場にいる人は二次受傷のリスクを負うといえる（大澤，2010）。

Brownら（1999）は，英国の警察官593名を対象とした調査の中で，職務で扱うストレッサーとして「死や災害」「暴行や傷害」「性犯罪」の３因子を見出し，中でも「性犯罪」は二次受傷のストレッサーとなる可能性があり，女性警察官は性犯罪被害者への対応が多いことから，精神的苦痛を受けるおそれが増すことを指摘した。また，男女ともに交通係の警察官はストレスを受けやすく，ソーシャル・サポートはストレスを軽減させるとしている。

今回は，警察・被害者支援室の協力を得て，2006年に実施した，犯罪被害者支援に携わった警察官へのアンケート調査について，そのストレス状況（ＣＩＳ・ＰＴＳＤ傾向の二次受傷など）および予防，ストレス緩和要因についての知見を得ることを目的として，臨床心理学的視点からデータ分析をおこなった。具体的には，まずＰＴＳＤ傾向の生起にどんな変数が影響を及ぼしているかについて検討し，次いで，コーピング・スタイル

とＰＴＳＤ傾向の関連を検討することにした。

２．方法

①対象

犯罪被害を支援したことがあるＡ県内の警察官を対象にして，調査を実施した。得られた回答の中から脱落や重複など問題のあるものを除いた426名分のデータを分析に用いることにした。なお，調査対象者の性別，年齢，婚姻状態，勤務年数，所属部門（係)は，Table１に示した。

Table 1　調査対象者の属性と内訳

		男性(408)	女性(18)	計
年齢	２０歳代	67	10	77
	３０歳代	91	8	99
	４０歳代	106	0	106
	５０歳代	144	0	144
婚姻状態	未婚	60	14	74
	既婚	348	4	352
勤続年数	１年未満	7	0	7
	１年から１０年	104	16	120
	１１年から２０年	63	2	65
	２１年から３０年	111	0	111
	３１年から４０年	123	0	123
所属部門	地域	181	6	187
	生活安全	35	4	39
	警務	22	5	27
	刑事	61	2	63
	交通	96	1	97
	警備	13	0	13

②質問紙

(1)犯罪被害者支援において最も衝撃を受けた事案に関する質問項目

犯罪被害者を支援した事案のうち最も衝撃を受けたものについて，その犯罪の種類，支援の発生時期，支援時の立場について，次のような回答を求めた。

Ａ）衝撃を受けた犯罪被害の種類

当該の犯罪被害が，大別するとどんな犯罪の種類に分類されるかについて質問をした。回答形式は，殺人罪，性犯罪，傷害罪，ひき逃げ事件，交通（死亡）事故事件，福祉犯被害少年に係る事件，誘拐のうちから１つを選択するものである。

Ｂ）衝撃を受けた犯罪被害を担当した時からの経過年数

当該の犯罪被害を担当した時期が，調査時点から約何年前であるか質問をした（以下，経過年数と略す)。回答形式は，経過年数を整数で記入し，１年未満の場合には０と記入することにした。

Ｃ）衝撃を受けた犯罪被害を担当した時の立場

当該の犯罪支援を担当した際の年齢（以下，担当時年齢と略す）と婚姻状態（以下，担当時婚姻状態と略す）について質問をした。年齢については，回答は10歳代，20歳代，30歳代，40歳代，50歳代の中から１つを選ぶ形式とし，コーディングはそれぞれを１点，２点，３点，４点，５点とすることにした。また，婚姻状態については，回答は未婚，既婚のうちどちらかを選ぶ形式とし，コーディングはそれぞれ１点，２点とした。

(2)ＰＴＳＤ傾向尺度

先述の最も衝撃を受けた事案において受けたストレス状況について調べることにした。そのために，「実況見分や被害者（または遺族）からの事情聴取などの職務を通じて感じられた（または今でも感じている）気持ち」について尋ねる質問文とＰＴＳＤに関する質問項目を設定した（Table2)。質問項目の内容と構成は米国精神医学会の診断基準DSM-IVに準拠しており，回答は，「まったくあてはまらない」「少しあてはまらない」「あてはまる」「かなりあてはまる」「非常にあてはまる」の５段階で回答する形式になっており，それぞれを１点，２点，３点，４点，５点として配点することにした。すなわち，合計値が高得点になるほど，ＰＴＳＤ傾向を強く示すということになる。

Table 2　ＰＴＳＤ傾向尺度

No.	項目
1	「衝撃を受けた事案」の様子がくり返し思い出された（思い出される。）
2	「衝撃を受けた事案」の様子がくり返し夢にみた。（夢にみる。）
3	また「衝撃を受けた事案」が発生するのではないかと思い，驚くことがあった。（驚くことがある。）
4	「衝撃を受けた事案」が思い出されるような物を見たり，聞いたりすると，心が痛んだ。（心が痛む。）
5	「衝撃を受けた事案」に関わった時のことを思い出すと胸がドキドキしたり，緊張した。（緊張する。）
6	「衝撃を受けた事案」について，考えたり，話題にすることをさけた。（さけている。）
7	「衝撃を受けた事案」を思い出させる出来事や場所をさけた。（さけている。）
8	「衝撃を受けた事案」のことをよく思い出せなかった。（よく思い出せない。）
9	「衝撃を受けた事案」の後，仕事，遊び，勉強，趣味などに打ち込めなかった。（打ち込めない。）
10	「衝撃を受けた事案」の後，孤独感を感じた。（感じる。）
11	「衝撃を受けた事案」の後，嬉しい気持ち，楽しい気持ちが少なくなった。（少ない。）
12	「衝撃を受けた事案」の後，将来のことを考えられなくなった。（考えられない。）
13	「衝撃を受けた事案」の後，寝つきが悪くなったり，すぐに目を覚ましたりした。（寝つきが悪い，すぐに目が覚める。）
14	「衝撃を受けた事案」の後，ちょっとしたことでカッとなり，イライラすることがあった。（イライラする。）
15	「衝撃を受けた事案」の後，気が散って，物事に集中できなかった。（できない。）
16	「衝撃を受けた事案」の後，用心深くなった気がした。（気がする。）
17	「衝撃を受けた事案」の後，ちょっとしたことにひどく驚いたりすることがあった。（ひどく驚くことがある。）

(3)ストレス・コーピング尺度

先述の最も衝撃を受けた事案におけるストレス・コーピングの様子と，通常におけるストレス・コーピングの様子について調べるために，Tri-axial Coping Scale 24（TAC-24；神村ら，1995）を用いた。前者については「衝撃を受けた事案の発生後，あなたはどのように考え，行動されましたか」という質問のもとにTAC-24を実施し，「事案後コーピング」と名付けた。また，後者については「普段の生活において，つらい状況に遭遇した時に，あなたはどのように考え，行動されますか」という質問のもとにTAC-24を実施し，「通常時コーピング」と名付けた。なお，TAC-24は３つの次元から構成されているが，煩雑さを避けるため「関与あるいは回避」および「問題焦点あるいは情動焦点」の２次元だけ用いることにし，「行動系機能あるいは認知系機能」の次元を省いて集計することにした。したがって，オリジナルの下位尺度の数は８つであるが，本研究では４つに設定し直して，①関与・問題焦点コーピング（情報収集・計画立案），②関与・情動焦点コーピング（カタルシス・肯定的解釈），③回避・問題焦点コーピング（責任転嫁・放棄/諦め），④回避・情動焦点コーピング（気晴らし・回避的思考）とした。なお，回答形式はオリジナルのとおり５段階（１点～５点）であり，高得点ほど当該のコーピングを多く使用していることを示す。

(4)情緒的支援尺度

先述の最も衝撃を受けた事案において，周囲から受けた情緒的支援について調べるために，情緒的支援ネットワーク認知尺度（宗像ら，1986）を用いた。オリジナルでは「家族の中で」，「職場の中で」，「その他の中で」の３つの領域ごとに10の質問項目が設定されており，それぞれの領域ごとに得点が算出されるが，本研究では３つの領域を合計した値のみ算出した。なお，各質問項目では，情緒的に支援してくれた人の有無を「いた」，「いなかった」で回答する形式になっており，それぞれを１点，２点と配点した。したがって，合計値が低得点になるほど，周囲から情緒的支援をより多く受けていると認知していることを示す。

(5)被害者支援理解尺度

被害者支援に対する理解度を調べるために，「あなたの被害者支援に対する考えや行動についてお尋ねします」という教示文と８つの質問項目を設定した(Table3)。質問項目の内容と構成は，被害者支援を専門とする第一執筆者と第二執筆者２名による検討を経て作成した。回答は「まったくあてはまらない」「少しあてはまらない」「あてはまる」「かなりあてはまる」「非常にあてはまる」の５段階で回答する形式になっており，それぞれを１点，２点，３点，４点，５点として配点することにした。すなわち，合計値が高得点になるほど，被害者支援への理解が深いことを示す。

Table 3　被害者支援理解尺度

No.	項目
1	被害者（又は遺族）のことを理解しようとする。
2	被害者（又は遺族）の状況を自分のことのように感じる。
3	被害者（又は遺族）のために何か役立つ事をしようとする。
4	被害者（又は遺族）の言葉や行動が気になる。
5	被害者（又は遺族）の視点に立って，物事を見ようとする。
6	警察官として被害者支援に携わることに責任を感じる。
7	被害者（又は遺族）の気持ちを和ませるため，よい感情を持っていることを伝える。
8	被害者支援にやりがいを感じる。

(6)被害者担当官または性犯罪指定捜査員に関する質問項目

被害者担当官または性犯罪指定捜査員に対する関心を調べるための質問項目として，「現在，被害者担当官または性犯罪指定捜査員の指定を受けていますか」，「これまでに，被害者担当官または性犯罪指定捜査員の指定を受けたことがありますか」，「被害者担当官または性犯罪指定捜査員の指定を受けたいですか（継続したいですか）」の３つを設定した。回答は，「はい」，「いいえ」で回答する形式になっており，それぞれ１点，２点と配点することにした。

②手続き

実施は2008年３月であった。上述の質問紙を，Ａ県警察本部の許可を得た上で各職場にて依頼し，回答は無記名式で実施した。そして，回答者ごとに得られた質問項目および尺度の値を変数とし，IBM SPSS Statistics 19を用いて統計的処理をおこなった。

３．結果と考察

大澤（2010）によれば，警察官が二次受傷を負うリスクが高まる要因として，「若い女性」「臨床経験が少ない」「人的トラウマを扱う」「組織や同僚からのサポートがない」「クライエントたちのトラウマに特化したトレーニングを受けていない」「公私のストレスレベルが高い」などがあげられる。

今回は，警察官の二次受傷（ＰＴＳＤ傾向）に視点をあてて述べていく。

①尺度の信頼性の検討

ＰＴＳＤ傾向尺度および被害者支援理解尺度についてCronbachのα係数を算出したところ，それぞれ .914および .937であった。いずれも高い値を示しており，ＰＴＳＤ傾向尺度および被害者支援理解尺度は充分な信頼性を有していた。

②各変数の平均値等

使用した質問項目・尺度の平均値および標準偏差をTable４に，質問項目・尺度の間の相関（Pearsonの積率相関係数ｒ）をTable５に示した。なお，衝撃を受けた犯罪被害の内訳はTable６に示した。

特に興味深いと思われる箇所を取り上げると，被害者支援理解尺度は，ＰＴＳＤ傾向尺度および事案後の回避・問題焦点コーピングを除く３つのコーピング，通常時の回避・問題焦点コーピングを除く３つのコーピング，情緒的支援尺度，被害者担当官・性犯罪指定捜査員の指定を受けたい項目との間で，正の弱い相関が認められた。また，情緒的支援尺度と通常時の関与・問題焦点コーピングとの間で，正の弱い相関が認められた。

Table 4　変数の平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
ＰＴＳＤ傾向尺度	23.2	7.2
事案後		
関与・問題焦点コーピング	10.6	4.5
関与・情動焦点コーピング	10.4	4.3
回避・問題焦点コーピング	7.2	2.2
回避・情動焦点コーピング	9.9	4.0
通常時		
関与・問題焦点コーピング	13.2	4.9
関与・情動焦点コーピング	13.2	4.6
回避・問題焦点コーピング	7.5	2.4
回避・情動焦点コーピング	11.8	4.4
情緒的支援尺度	50.4	8.4
被害者支援理解尺度	23.8	6.4
被害者担当官または性犯罪指定捜査員の指定		
指定を現在受けていますか	1.1	0.3
これまでに指定を受けたことがありますか	1.3	0.4
指定を受けたいですか（継続したいですか）	1.2	0.4

Table 6　衝撃を受けた犯罪被害

内容	男性(408)	女性(18)	計
殺人罪	81	2	83
性犯罪	73	10	83
傷害罪	22	0	22
ひき逃げ事件	24	0	24
交通（死亡）事故事件	188	4	192
福祉犯被害少年に係る事件	20	2	22

Table 5　変数間の相関（r）

	②	③	④	⑤	⑥ A)	⑥ B)	⑥ C)	⑥ D)	⑦ A)	⑦ B)	⑦ C)	⑦ D)	⑧	⑨	⑩ A)	⑩ B)	⑩ C)
①性別	-.10	-.20	-.29	.07	.13	.16	-.01	.12	.10	.14	.05	.14	.05	.10	.49	.24	.29
②経過年数	1.00	-.09	.09	-.01	-.15	-.13	-.07	-.08	-.15	-.15	-.03	-.09	-.04	-.06	-.06	-.14	-.06
③担当時年齢		1.00	.59	.01	-.11	-.09	.00	-.07	-.19	-.18	-.05	-.13	-.04	-.03	-.06	.19	-.13
④担当時婚姻状態			1.00	.03	-.07	-.08	-.04	-.09	-.10	-.12	-.09	-.12	.01	-.03	-.11	.15	-.10
⑤ＰＴＳＤ傾向尺度				1.00	.36	.35	.48	.44	.20	.17	.34	.28	-.03	.20	.05	.00	.10
⑥事案後																	
A) 関与・問題焦点コーピング					1.00	.75	.36	.63	.70	.54	.26	.48	.12	.27	.06	-.07	.14
B) 関与・情動焦点コーピング						1.00	.50	.80	.52	.66	.34	.57	.04	.24	.12	-.04	.07
C) 回避・問題焦点コーピング							1.00	.59	.18	.27	.75	.41	-.06	.10	.03	-.04	-.03
D) 回避・情動焦点コーピング								1.00	.41	.55	.42	.71	.03	.21	.12	-.02	.01
⑦通常時																	
A) 関与・問題焦点コーピング									1.00	.76	.24	.58	.20	.33	.04	-.06	.10
B) 関与・情動焦点コーピング										1.00	.33	.78	.16	.33	.10	-.04	.07
C) 回避・問題焦点コーピング											1.00	.46	-.02	.08	.03	-.06	-.01
D) 回避・情動焦点コーピング												1.00	.10	.26	.09	-.02	.01
⑧情緒的支援尺度													1.00	.22	.08	.10	.14
⑨被害者支援理解尺度														1.00	.07	.06	.23
⑩被害者担当官・性犯罪指定捜査員の指定																	
A) 指定を現在受けていますか															1.00	.50	.36
B) これまでに指定を受けたことがありますか																1.00	.31
C) 指定を受けたいですか（継続したいですか）																	1.00

(N=426)

被害者支援理解尺度とＰＴＳＤ傾向尺度の相関からは，事件から強い衝撃を受けた警察官ほど被害者の支援に対して理解が深まる可能性があると考えられる。コーピングと被害者支援理解尺度との間の相関の意味については，不明である。情緒的支援尺度および被害者担当官・性犯罪指定捜査員の指定に対する希望の項目は，それぞれ，情緒的支援が少なかった，指定を受けたくない，という場合に高い配点になっているため，被害者支援理解尺度との関係では，被害者支援への理解があるほど，情緒的支援が少なかった，指定を受けたくない，ということが示されている。被害者担当官・性犯罪指定捜査員に指定を受けると，個人的感情とは別に，役割，責任が生じてくるということも考えられよう。これらの結果の意味についても不明であるが，警察官の業務における被害者支援は今後ますます重要になってくるため，その理解を促進したり阻害したりする諸条件について，より詳細に調査していく必要があると考えられる。

③ＰＴＳＤ傾向の生起に影響を及ぼす変数

警察官が職務において関わった事案においてどのような変数がＰＴＳＤ傾向の生起に影響を及ぼしたかについて検討するために，重回帰分析をおこなった。すなわち，性別および経過年数，担当時年齢，担当時婚姻状態，情緒的支援尺度，ストレス・コーピング尺度を説明変数として投入し，ＰＴＳＤ傾向尺度得点を基準変数として処理をおこなった。なお，性別については，男性は１，女性は２，担当時婚姻状態については，未婚は１，既婚は２，というようにダミー変数化を施した。分散分析により重回帰式の有意性を検討したところ，有意な結果が認められた（$F(13,412)=14.2$, $p<.001$）。また，重決定係数R^2は .31であった。さらに，標準偏回帰係数βを検討した結果，事案後の関与・問題焦点コーピングおよび事案後の回避・問題焦点コーピング，事案後の回避・情動焦点コーピングにおいて有意な正の影響力が認められた。また，性別および担当時婚姻状態，通常時の関与・情動焦点コーピングにおいて有意傾向のある正の影響力，通常時の関与・情動焦点コーピングにおいて有意傾向のある負の影響力が認められた。以上についての詳細な結果は，Table７に示した。

Table 7　PTSD傾向尺度得点を基準変数とした重回帰分析

説明変数	β
性別	.08 +
経過年数	.04
担当時年齢	-.01
担当時婚姻状態	.09 +
事案後	
関与・問題焦点コーピング	.17 *
関与・情動焦点コーピング	-.11
回避・問題焦点コーピング	.37 **
回避・情動焦点コーピング	.24 **
通常時	
関与・問題焦点コーピング	.11
関与・情動焦点コーピング	-.18 +
回避・問題焦点コーピング	-.02
回避・情動焦点コーピング	.03
情緒的支援尺度	-.03

$R=.56$　$R^2=.31$　（+: $p<.10$, *: $p<.05$, **: $p<.01$）

以上の結果より，ＰＴＳＤ傾向の高さは，事案後コーピングにおいては関与・情動焦点コーピング以外の３つの使用の多さと関連があることが明らかになった。有意傾向ではあるが，事案後コーピングとは対照的に，通常時コーピングにおいては関与・情動焦点コーピングの少なさと関連があることがわかった。すなわち，ＰＴＳＤ傾向の高い警察官は，職務で衝撃を受けた場面および日常生活の場面の双方において，ストレッサーに接近してそれを気持ちの上で解消するというコーピングの使用に積極的でない，すなわち大変だった出来事について直接に取り上げて愚痴をこぼしたりよい意味にとらえ直したり等の対処をとりにくい傾向にあると考えられる。職場の研修等の心理教育によって，困難な問題に直接に対峙してそれを取り除くことだけがストレスへの対処のすべてではなく，そのことを周囲に語ったり自分の中での感じ方を変えたりすることも意味のある対処であることを啓発していく必要があるだろう。

また，有意傾向ではあるが，女性であることおよび既婚であることが，ＰＴＳＤ傾向得点の高さに結びついていることが明らかになった。性別の影響については，トラウマ研究および一般的なストレス研究においても同様の傾向が数多く報告されている。本研究では女性の対象者が少ないとい

う問題を抱えているが，先行研究と合致する結果を得ることができた。

Olff（2008）は，女性は男性に比べ，トラウマ直後の急性感情反応を報告することが多く，女性においてＰＴＳＤのリスクが高いと述べており，女性警察官への支援は，より手厚いものにする必要があるだろう。婚姻状態については，既婚者のほうが心理的負荷が高く示された。既婚者は守るべき家族がありそれに伴う責任が大きいと感じているため，ストレッサーをより過大に認知・評価する可能性が高いからかもしれない。同様の傾向は，ベトナム戦争に出征したアメリカ兵のＰＴＳＤの発症率においても指摘されている。とはいえ，本研究の結果においては，R^2の値が充分に大きいわけではないため，控えめに受けとったほうがよいかもしれない。

④コーピング・スタイルとＰＴＳＤ傾向の関連

実際場面におけるストレスへの対処は，異なるコーピングが同時に使用されたり，場面に応じて用いられるコーピングが変化したりすると考えられている。そこで，それぞれのコーピングとＰＴＳＤ傾向との関連を個々に捉えるのではなく，コーピングの併用の仕方や場面による使い分けの仕方のパターン，すなわちコーピング・スタイルの観点からＰＴＳＤ傾向との関連を検討することにした。したがって，コーピング・スタイルを要因，ＰＴＳＤ傾向尺度得点を従属変数とする分散分析をおこなうことにより，このことを調べることにした。

まず，そのための準備として，事案後コーピングと通常時コーピングを合わせた８尺度を変量（Ｚ得点化）としてクラスター分析（k-mean法）をしたところ，Fig.1に示した４つのクラスターに分類できた。

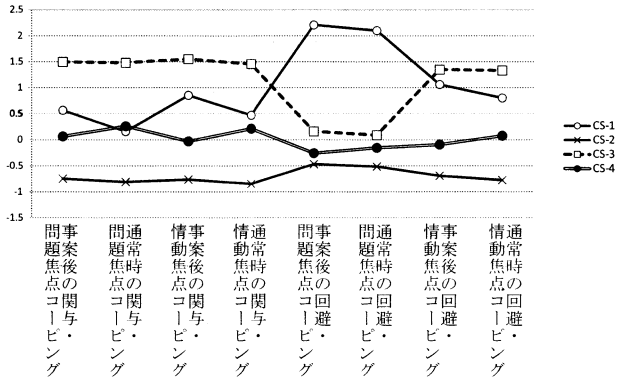

Fig. 1　クラスター分析の結果

なお，Fig.1では同種類のコーピングの場面による差異を把握しやすくするために，並び順を事案後コーピングと通常時コーピングを交互に配置してある。本研究ではこれらのクラスターをコーピング・スタイルに相当するものと考えて，それぞれをCS-1，CS-2，CS-3，CS-4と命名した。それらのコーピング・スタイルの特徴は次のとおりである。CS-1は，事案後および通常時の双方において他の３つのコーピングに比して回避・問題焦点コーピングを多用し，且つ通常時に比して事案後にはすべてのコーピングを多用する。CS-2は，全般的にコーピングの使用が少ない。CS-3は，事案後および通常時の双方において他の３つのコーピングに比して回避・問題焦点コーピングを少なめに（平均的水準で）使用し，且つ事案後と通常時のコーピングの使用水準がほぼ同じである。CS-4は，全般的にコーピングの使用が平均的である。

次いで，４つのコーピング・スタイルを要因とし，ＰＴＳＤ傾向尺度得点を従属変数とした分散分析をおこなったところ，要因の効果が有意であった（$F(3,422)=33.7$，$p<.001$）。下位検定の結果，CS-1およびCS-3のＰＴＳＤ尺度得点の平均値は，CS-2およびCS-4よりも有意に高かった。また同様に，CS-4のＰＴＳＤ傾向尺度得点の平均値はCS-2よりも有意に高かった（分散分析と下位検定の詳細はTable8を参照）。すなわち，ＰＴＳＤ傾向の高さは，CS-1およびCS-3が上位，CS-4が中位，CS-2が下位という順序を示した。

Table 8　コーピング・スタイルを要因とした分散分析

従属変数＼要因	コーピング・スタイル	N	平均値	標準偏差	F値 (df=3, 422)	下位検定 (Tamhane's T2)
ＰＴＳＤ傾向尺度得点	CS-1	49	30.29	11.11	33.7**	CS-1 > CS-4**
	CS-2	163	20.39	3.60		CS-3 > CS-4*
	CS-3	56	26.18	7.66		CS-1, CS-3, CS-4 > CS-2**
	CS-4	158	22.93	6.44		

（ *: p< .05, **: p< .01）

以上の結果を踏まえて考察を進めていく。CS-4はその特徴どおり平均的な人々であるため，不健康な群とは考えにくいだろう。また，CS-2はCS-4よりもＰＴＳＤ傾向尺度の得点が低いため，より

健康度が高いと推測できる。しかしながら，コーピングの面で無為に近い状態が健康と結びついていることには，若干の違和感が残る。この問題に対しては，CS-2ではストレッサーの認知・評価がほとんどなかったためにコーピングについて意識化されなかったためと説明できるかもしれない。それ故，ストレッサーの度合い（衝撃度）について確認しておくべきだった等，質問紙の構成に工夫の余地があったことは否めない。

そして，CS-1およびCS-3のコーピング・スタイルをもつ警察官は，相対的にＰＴＳＤ傾向を生じやすいと考えられる。

CS-1では，場面を問わず回避・問題焦点コーピングの得点が高いことから他者のせいにしたり諦めたりする対処をとりやすく，Locus of control が恒常的に外的統制に偏っていると考えられる。このタイプには，内的統制感や自尊感情を高めるような支援をおこなう取り組みが必要であろう。自分のペースで進められる事柄や他者に喜ばれる手応えを体験できるような機会を増やすことが有効かもしれない。

CS-3では，事案後と通常時の間でコーピングの水準に変化がほとんどないことから，場面に応じてコーピングの組み合わせを変化させる柔軟性が乏しく，そのことがCS-3のレジリエンスを減じていると考えられる。

レジリエンスについてBonnano（2004）は，「極度の不利な状況に直面しても，正常な平衡状態を維持することができる能力」とし，それを大多数の人が有し，その在り方もさまざまな個人差があるとしている。小塩ら（2002）の研究によると，レジリエンスを発揮している者に特徴的な心理的特性としては，「肯定的な未来志向性」「感情の調整能力」「興味・関心の多様性」「忍耐力」の４要因が抽出されるという。また，「精神的回復力尺度」は，自尊感情と正の相関を示す一方で，ネガティヴ・ライフ・イベント経験（過酷な経験）数や苦痛ライフ・イベント経験数と無相関であることが示された。つまり，困難に立ち向かう力には，「自尊感情」が深く関与しており，過酷な体験を重ねることで，その人の精神的な力を弱めはしないことを示している。

また，印象の域を出ないが，CS-3では，回避・問題焦点コーピングの使用は平均的水準とはいえ，他の３つのコーピングと比較して少ない点は，CS-1と逆形でもありバランスの悪さが関係しているのかもしれない。CS-3のようなタイプには，職場の研修等を通じた心理教育によって，コーピングの柔軟性や併用の意義を啓発していく必要があるだろう。

さて，先述とおり，女性警察官や既婚者への支援はより手厚くする必要があるが，上田（2010）の警察官を対象にした調査結果でも，ＰＤＩ（Peritraumatic Distress Inventry）得点が男性よりも女性に有意に高く，女性では支援活動中とその直後に恐怖や無力感などの強い感情を報告しやすいことが認められている。女性警察官（特に性犯罪指定捜査員）がより健康でいられることが，自ずと犯罪被害者への支援につながるものと思われる。さらに，上田（2006）の調査結果では，二次受傷の知識を持つだけでは二次受傷の軽減に有効ではなく，より積極的な二次受傷対策が求められることが示され，職場での情緒的支援者を多く持つことが二次受傷を軽減するのに有効となる可能性が示唆されている。バーンアウトを研究した宗像ら（1988）は，燃え尽きを防ぐ要因として，情緒的支援者の存在が有意な影響力を持っているとしている。二次受傷の先行研究でも支援者保有が有効であることは，多々指摘されており，職場での精神的支えをどのように作るかが，犯罪被害者支援を左右する鍵のように思われる。

本研究は，平成20年度～22年度科学研究費補助金〔基盤研究（C）〕研究成果報告書の一部を発表したものである。

引用文献

Bannano. G. A. :Loss, trauma and human resilience:have we underestimated the human capacity to thrive after extremely aversive events?. American Journal of Psuchology, 59;836-846, 2001.

Brown. J., Fielding, J., &Grover, J., Distinguishing traumatic, vicarious and routine operational stressor exposure and attendant adverse consequences in a sample of police officers. Work Stress, 13(4), 312-325, 1999.

神村栄一・海老原由香・佐藤健二ほか，対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成，教育相談研究，33，41-47，1995年

小西聖子，二次受傷―治療者へのトラウマの影響―，精神療法第33巻第２号，170-175，2007年

小塩真司・中谷素之・金子一史ほか，ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性　精神的回復力尺度の作成，カウンセリング研究35巻，57-65，2002年

宗像恒次，稲岡文昭，高橋徹ほか，燃え尽き症候群，土井健郎監修，金剛出版，1988年

宗像恒次・仲尾唯治・藤田和夫ほか，都市住民のストレスと精神健康度，精神衛生研究，32，47-68，1986年

Olff, M.，ＰＴＳＤにおける性差，トラウマティック・ストレス第６巻，33-47，2008年

大澤智子，二次受傷，トラウマティック・ストレス第８巻第２号，94-95，2010年

上田鼓，警察官における二次受傷の男女別規定要因についての研究，トラウマティック・ストレス第４巻第２号，75－83，2006年

上田鼓，警察官の外傷性ストレスの実態に関する研究―ＰＴＳＤ症状と気分・不安障害との関連について―，トラウマティック・ストレス第８巻第１号，35-44，2010年

参考文献

久留一郎　心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）に関する心理学的研究（Ｉ），九州心理学会第51回大会発表論文集，1990年

久留一郎・餅原尚子，極度のいじめを機に発症した外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）～ロールシャッハ・テストを通しての心理治療的経過～，ロールシャッハ研究第38巻，127－148，1997年

久留一郎・餅原尚子他，スクールトラウマに関する教育心理学的研究（Ｉ）～学校災害におけるＰＴＳＤ体験と危機介入に関する調査～，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第12巻，162－182，2002年

久留一郎，ＰＴＳＤ：ポストトラウマティック・カウンセリング，駿河台出版社，82，97，2004年

餅原尚子，救援者の災害ストレス（ＰＴＳＤ，ＣＩＳ）の予防とケアに関する臨床心理学的研究，平成15年度・16年度・17年度科学研究費補助金（若手研究(B)）報告書，2006年

村瀬嘉代子，被害者支援の基本，現代のエスプリ524号，久留一郎編集，トラウマと心理臨床：被害者支援に求められるもの，ぎょうせい，26-36，2011年

Abstract

A Study on CIS, PTSD and Secondary Traumatic Stress Suffered by The Police Officers Helping Cime Victims

A questionnaire survey was carried out in 2006 for the police officers who took part in support activities for crime victims. We analyzed the results of 426 cases collected by Clime Victims Branch of A Police Office, concerning the stress situation (CIS, Secondary traumatic stress etc.), its prevention, and stress coping factors from the point of view of Clinical psychology. As the result, following points became clear: a) 'Balance' is important to cope with stress. b) It is more effective for the person with PTSD tendency to be given support and preventive help according to his/her own stress coping style. c) Female police officers and married police officers need to be supported with greater care. As the many previous researches on Secondary traumatic stress indicate, this investigation also seems to prove that the key in supporting crime victims is for the helpers themselves to have means of mental support at their workplaces.

KeyWords：　Crime Victims, Police Officers, CIS, PTSD, Secondary Traumatic Stress